旺文社文庫

武蔵野・牛肉と馬鈴薯

(他) 少年の悲哀・空知川の岸辺・
春の鳥・あの時分

国木田独歩著

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

〔編集顧問〕（五十音順）
伊藤整　茅誠司　木村毅
塩田良平　中島健蔵　森戸辰男

旺文社文庫　武蔵野・牛肉と馬鈴薯 他四編　100円

昭和40年12月10日　初版発行
昭和43年6月20日　重版発行

著者　国木田独歩
発行者　鳥居正博
印刷所　加藤文明社印刷所

文社
東京都新宿区横寺町
電話 東京(03) 269－2111〔代〕

（中村印刷・三宅印刷・穴口製本）

旺文社文庫

武蔵野・牛肉と馬鈴薯

旺文社

目次

武蔵野の　五
牛肉と馬鈴薯　三
少年の悲哀　六
空知川の岸辺　七
春の鳥　九
あの時分　一一

解説　中島健蔵　一二

独歩の生涯と作品
一、出生から幼少期まで、　一二
二、形成期・上京　一三
三、燃焼期・欺かざるの記　一三
四、現実と詩　一三
五、現実との対決　一四
六、人間観・運命の戦慄　一四
七、平民道徳　一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八、現実との格闘　一四五
九、敗北と勝利　一四七
独歩の小説　野田宇太郎　一四九
独歩と机を並べたころ　永田新之允　一五四
代表作品解題　一五九
参考文献　一六三
年譜　一六四
挿絵　賀茂牛之輔

原文は新仮名づかいに改めたほか、原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

（編集部）

武蔵野

一

「武蔵野の俤は今纔に入間郡に残れり」[1]と自分は文政年間[2]にできた地図で見たことがある。そしてその地図に入間郡「小手指原久米川は古戦場なり　太平記[3]元弘三年[4]五月十一日源平小手指原にて戦ふ事一日が内に三十余度　日暮れば平家三里退て久米川に陣を取る　明れば源氏久米川の陣へ押寄ると載せたるは此辺なるべし」と書き込んであるのを読んだことがある。自分は武蔵野の跡のわずかに残っている所とは定めてこの古戦場あたりではあるまいかと思って、一度行ってみるつもりでいてまだ行かないが実際は今もやはりそのとおりであろうかと危ぶんでいる。ともかく、画や歌でばかり想像している武蔵野をその俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願いではあるまい。それほどの武蔵野が今ははたしていかがであるか、自分は詳しくこの問に答えて自分を満足させたいとの望みを起こしたことは実に一年前のことであって、今はますますこの望みが大きくなってきた。

さてこの望みがはたして自分の力で達せらるるであろうか。自分はできないとは言わぬ。容易でないと信じている、それだけ自分は今の武蔵野に趣味を感じている。たぶん同感の人も少なからぬことと思う。

それで今、少しく端緒をここに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じたところを書いて自

(1)埼玉県南部にある郡。武蔵国の入間郡といった。(2)一八一八～二九年。(3)室町時代の戦記物語。(4)一三三三年。

分の望みの一小部分を果たしたい。まず自分がかの問に下すべき答えは武蔵野の美今も昔に劣らずとの一語である。昔の武蔵野は実地見てどんなに美であったことやら、それは想像にも及ばんほどであったに相違あるまいが、自分が今見る武蔵野の美しさはかかる誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かしているのである。自分は武蔵野の美と言った、美といわんよりむしろ詩趣といいたい、そのほうが適切と思われる。

二

そこで自分は材料不足のところから自分の日記を種にしてみたい。自分は二十九年の秋の初めから春の初めまで、渋谷村[1]の小さな茅屋に住んでいた。自分がかの望みを起こしたのもその時のこと、また秋から冬のことのみを今書くというのもそのわけである。

九月七日――「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき林影一時に煌めく、――」

これが今の武蔵野の秋の初めである。林はまだ夏の緑のそのままでありながら空模様が夏と全く変わってきて雨雲の南風につれて武蔵野の空低くしきりに雨を送るその晴間には日の光水気を帯びてかなたの林に落ちこなたの杜にかがやく。自分はしばしば思った、こんな日に武蔵野を大観することができたらいかに美しいことだろうかと。二日おいて九日の日記にも「風強く秋声野にみつ、浮雲変幻たり」とある。ちょうどこのころはこんな天気が続いて大空と野との景色が間断なく変化

(1)現在の渋谷のあたり。(2)雨が降ったり降らなかったり。

して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしくきわめて趣味深く自分は感じた。

まずこれを今の武蔵野の秋の発端として、自分は冬の終わるころまでの日記を左に並べて、変化の大略と光景の要素とを示しておかんと思う。

九月十九日――「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫声しげし、天地の心なほ日さめぬが如し。」

同二十一日――「秋天拭ふが如し、木葉火の如くかゞやく。」

十月十九日――「月明かに林影黒し。」

同二十五日――「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入りて雲の絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で野を歩み林を訪ふ。」

同二十六日――「午後林を訪ふ。林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、[1]黙想す。」

十一月四日――「天高く気澄む、夕暮に独り風吹く野に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色漸く到り、林影漸く遠し。」

同十八日――「月を踏で散歩す、青煙地を這ひ月光林に砕く。」

同十九日――「天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目黄葉の中緑樹を雑ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる。」

同二十二日――「夜更けぬ、戸外は林をわたる風声ものすごし。滴声頻なれども雨は已に止みたりとおぼし。」

同二十三日――「昨夜の風雨にて木葉殆ど揺落せり。稲田も殆ど刈り取らる。冬枯の淋しき様と

(1)ていし。流し目で見る。ながめる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なりぬ。」

同二十四日――「木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懐し。」

同二十六日――夜十時記す「屋外は風雨の声ものすごし。滴声相応ず。今日は終日霧たちこめて野や林や永久の夢に入りたらんごとく。午後犬を伴ふて散歩す。林に入り黙座す。犬眠る。水流林より出でゝ林に入る、落葉を浮べて流る。をり〳〵時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり。」

同二十七日――「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うらゝかに昇りぬ。屋後の丘に立て望めば富士山真白ろに連山の上に聳ゆ。風清く気澄めり。

げに初冬の朝なるかな。

田面に水あふれ、林影倒に映れり。」

十二月二日――「今朝霜、雪の如く朝日にきらめきて美事なり。暫くして薄雲かゝり日光寒し。」

同二十二日――「雪初て降る。」

三十年一月十三日――「夜更けぬ。風死し林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝげて戸外をうかゞふ、降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武蔵野沈黙す。而も耳を澄せば遠き彼方の林をわたる風の音すゝ、果して風声か。」

同十四日――「今朝大雪、葡萄棚堕ちぬ。

夜更けぬ。梢をわたる風の音遠く聞ゆ、あゝこれ武蔵野の林より林をわたる冬の夜寒の風なるかな。雪どけの滴声軒をめぐる。」

同二十日――「美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭針の如し。」

二月八日――「梅咲きぬ。月漸く美なり。」

三月十三日――「夜十二時、月傾き風急に、雲わき、林鳴る。」

同二十一日――「夜十一時。屋外の風声をきく、忽ち遠く忽ち近し。春や襲ひし、冬や遁れし。」

三

昔の武蔵野は萱原のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といってもよい。すなわち木はおもに楢のたぐいで冬はことごとく落葉し、春はしたたるばかりの新緑萌えいずるその変化が秩父嶺以東十数里の野いっせいに行なわれて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑陰に紅葉に、さまざまの光景を呈するその妙はちょっと西国地方(1)また東北の者には解しかねるのである。元来日本人はこれまで楢のたぐいの落葉林の美をあまり知らなかったようである。林といえばおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも楢林の奥で時雨を聞くというようなことは見当たらない。自分も西国に人となって少年の時学生として初めて東京に上ってから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至ったのは近来のことで、それも左の文章が大いに自分を教えたのである。

(1)関西地方。

「秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺の林の中に座していたことがあった。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合い。あわあわしい白雲が空一面に棚引くかと思うと、ふとまたあちこちまたたく間雲切れがして、無理に押し分けたような雲間から澄みて怜悧し気に見える人の眼のごとくにほがらかに晴れた青空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かにそよいだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、長たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうな(1)おしゃべりでもなかったが、ただようやく聞き取れるか聞き取れぬほどのしめやかな私語の声であった。そよ吹く風は忍ぶように木末を伝った、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようすが間断なく移り変わった、あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑したように、くまなくあかみわたって、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思いがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散りしいた、細かな落ち葉はにわかに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしったような「パアポロトニク」(蕨のたぐい)のみごとな茎、しかも熟えすぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして目前に透かして見られた。

あるいはまた四辺一面にわかに薄暗くなりだして、またたく間に物のあいろも見えなくなり、(2)樺の木立ちも、降り積もったままでまた日の眼にあわぬ雪のように、白くおぼろにかすむ——と

(1)うすら寒そうな。(2)くべつ。

小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するようにバラバラと降って通った。樺の木の葉は著しく光沢がさめてもさすがになお青かった、がただそちこちに立つ稚木のみはすべて赤くも黄ろくも色づいて、おりおり日の光りが今雨に濡れたばかりの細枝の茂みをもれて滑りながらに脱けてくるのをあびては、キラキラときらめいた。」

すなわちこれはツルゲーネフの書きたるもの[1]を二葉亭[2]が訳して「あひびき」と題した短編の冒頭にある一節であって、自分がかかる落葉林の趣を解するに至ったのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これはロシアの景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は楢の木、植物帯からいうとはなはだ異なっているが落葉林の趣は同じことである。自分はしばしば思うた、もし武蔵野の林が楢のたぐいでなく、松か何かであったらきわめて平凡な変化に乏しい色彩一様なものとなってさまで珍重するに足らないだろうと。

楢のたぐいだから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。凩が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かのごとく遠く飛び去る。木の葉落ち尽くせば、数十里の方域にわたる林が一時に裸体になって、青ずんだ冬の空が高くこの上にたれ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気が一段澄みわたる。遠い物音が鮮やかに聞こえる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想すと書いた。「あひびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くということがどんなに秋

(1)一八一八～八三、ロシアの小説家。「父と子」「猟人日記」など。(2)二葉亭四迷。一八六三～一九〇八、明治の小説家。ツルゲーネフの作品を翻訳して早くからわが国に紹介した。

の末から冬へかけての、今の武蔵野の心にかなっているだろう。秋ならば林のうちより起こる音、冬ならば林のかなた遠く響く音。

鳥の羽音、さえずる声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢の陰、林の奥にすだく虫の音。空車荷車の林をめぐり、坂を下り、野路を横ぎる響き。蹄で落葉をけちらす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗りに出かけた外国人である。何ごとをか声高に話しながらゆく村の者のだみ声、それもいつしか、遠かりゆく。ひとり淋しそうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣の林でだしぬけに起こる銃音。自分が一度犬をつれ、近所の林を訪い、切り株に腰をかけて書を読んでいると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとにねていた犬が耳を立ててきっとそのほうを見つめた。それぎりであった。たぶん栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹もずいぶん多いから。もしそれ時雨の音に至ってはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨はわが国でも和歌の題にまでなっているが、広い、広い、野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびやかに通り過ぐる時雨の音のいかにも幽かで、また鷹揚な趣があって、やさしく懐しいのは、実に武蔵野の時雨の特色であろう。自分がかつて北海道の深林で時雨にあったことがある、これはまた人跡絶無の大森林であるからその趣はさらに深いが、そのかわり、武蔵野の時雨のさらに人なつかしく、私語くがごとき趣はない。

秋の中ごろから冬の初め、試みに中野あたり、あるいは渋谷、世田ヶ谷、または小金井の奥の林を訪うて、しばらくすわって散歩の疲れを休めてみよ。これらの物音、たちまち起こり、たちまちやみ、しだいに近づき、しだいに遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちてかすかな音をし、それも

やんだ時、自然の静粛を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであろう。武蔵野の冬の夜ふけて星斗闌干(1)たる時、星をも吹き落としそうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分はしばしば日記に書いた。風の音は人の思いを遠くにいざなう。自分はこのものすごい風の音のたちまち近くたちまち遠きを聞いては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけたこともある。

熊谷直好(2)の和歌に、

よもすがら木葉かたよる音きけは
しのひに風(3)のかよふなりけり

というがあれど、自分は山家の生活を知っていながら、この歌の心をげにもと感じたのは、実に武蔵野の冬の村居の時であった。

林にすわっていて日の光のもっとも美しさを感ずるのは、春の末より夏の初めであるが、それは今ここには書くべきでない。その次は黄葉の季節である。半ば黄ろく半ば緑な林の中に歩いていると、澄みわたった大空が梢々のすきまからのぞかれて日の光は風に動く葉末葉末にくだけ、その美しさ言いつくされず。日光とか碓氷とか、天下の名所はともかく、武蔵野のような広い平原の林がくまなく染まって、日の西に傾くとともに一面の火花を放つというも特異の美観ではあるまいか。もし高きに登って一目にこの大観を占めることができるならこの上もないこと、よしそれがで

(1)星斗は多くの星。闌干は、星や月が輝いてきらきらするさま。(2)一七八二～一八六二、徳川末期の歌人。香川景樹の門人。(3)人知れず。ひそかに。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com